

二ユ一ヨ一ク補習授業校

平成二十(二〇〇八)年度

答辞・送辞

送辞

在校生代表 A校高等部一年 竹山 佳輝

本日卒業されるA校、WT校、そしてLI校の皆様、ご卒業おめでとうございます。最後まで諦めずに「卒業」という目標を成し遂げられた事を心から尊敬します。

卒業生の皆さんが、補習校に通って来た理由は一人一人違うと思います。日本語や日本文化の習得、中には、親に無理やり行かされ、毎週ぶすつとして、面倒くさそうにして通って来た人もいますよね。何度かもう辞めてしまおうかと悩んで、立ち止まって、それでもまた歩き始めて、ようやくゴールまでたどりついた人もいるかもしれません。ここに通ってきた理由はそれぞれ違ったとしても、ひとつだけ僕達に共通する理由があります。それは、補習校でしか会えない、とても大切な仲間に出会う事です。

僕は、長い間、自分自身の事を「アメリカン」だと思っていました。と言うのは、ニューヨークのウェストチェスターで生まれて、周りが皆、アメリカ人と言う環境の中でずっと育って来たのです。当然、英語の方が日本語よりはるかに得意です。そのため、小学一年生から補習校に通っていましたが、補習校のことを真剣に考えず、どうでもいいやと思っていたのです。ところが、中学になって、宿題は増え、勉強の内容もだんだん難しくなってきました。現地校と補習校の他に、野球、剣道、ピアノにジャズバンドと死にそうなくらい忙しいスケジュールに追われるようになりました。そこで、僕は初めて、補習校について自分自身に疑問を投げかけたのです。「なぜ、みんなが遊んでいる土曜日に、わざわざ補習校に来ているのだろうか。」と。

そして、ようやく気づいたので。僕はアメリカの文化という服をまとっているけれど、中身は正真正銘の「日本人」だ。日本人でありながら、日本の事はよく知らないし、日本語もうまく書けない。僕のようにいい加減な人間が、日本人として恥ずかしくないように訓練される場所、それが補習校だと。こうして、自分の中で意識が変わった時、難しい漢字も少しは頑張ってみようかなと思えるようになりました。そして、仲間達と共に補習校で学ぶうちに、次第に日本人として

の「誇り」と言えるようなものが芽生えて来ました。おそらく、皆さんも僕と似たような体験をした事があるのではないかと思えます。そういう意味で、僕達は、日米と言う二つの違った文化を肩に背負って歩く、運命共同体と言えるかもしれませんね。

数年前に、僕は一人で香港に行ったことがあります。引越して行った補習校の友達のところ遊びに行っただけです。その時が、僕にとって人生で初めての海外一人旅でしたが、友達に会えるのが嬉しくて、不安なんかそっちのけでした。二人で香港の町の中を遊び回ったひとは最高に楽しかったです。皆さんも補習校で何人も友達を作り、数えきれないほどの思い出があることでしょう。これは、A校だけではなくて、LI校でも同じだと思います。僕は、LI校の友達を何人か知っていますが、この人達は100歳になっても、ずっと一緒にいそうなほどお互いのことを愛し合っています。このように、補習校での仲間達は、とても大事な「人生の宝物」になると僕は信じています。

A校では、高一と高二がひとつのクラスとして授業を受けています。入学当初は、みんなが互いによく交わることができると不安でした。しかし、球技大会、のみの市、クリスマスパーティーなどA校の様々な行事を先輩達と協力し合って計画しているうちに、次第に良い関係になって行きました。先輩達は、いつも僕達が困っていたら助けてくれ、A校みんなが尊敬する、とても大きな存在でした。サイクロンの被害にあったミャンマーの人達を助ける募金を呼びかけていた時、大声で叫んでいた先輩達は、ちよつと大人っぽくかっこよかったです。卒業して、皆さんはバラバラになり、それぞれの道を歩むことでしょう。しかし、補習校で共に人生の一期を頑張ったので、皆さんは強い絆で結ばれたことと思います。『You'll never walk alone!』『君は一人じゃない。』これは、イギリスのサッカーチームのホームゲームに刻まれた言葉です。これから、皆さんは未知の世界へ旅立って行かれますが、決して一人ではないと言うことを心のどこかに覚えておいて下さい。以前、僕はWT校を卒業する時、寄せ書きにこんなことを書きました。「クラスメイトよ、大志を抱け！ あれっ、僕の志って何だったっけ？」皆さんは、こんな風になることなく、自分の夢をしっかりと持って、それぞれのゴールに向かって前進されますよう

に心から願っています。

最後になりますが、感謝と応援の気持ちを思いっきりこめて、卒業生の皆さんへこの言葉を贈ります。

『You'll never walk alone!』

答辞（I）

LI校初等部卒業生代表 石川 力

ぼくがLI校幼児部年中組に入ってから、丸八年がたちました。でも実際は補習校とぼくのつき合いは十年にさかのぼります。なぜなら、ぼくは、二才の時から、三才年上の兄の送りむかえで母につれられて、毎週のように補習校に来ていたからです。そう考えると、僕の人生にとって補習校は、とても大きな意味があるように思います。

今日まで、毎週あたりまえのように通い続けて来た補習校ですが、ここまで来るには、つらいこともたくさんありました。たとえば、毎週出される宿題は、学年が上がるにつれ、量が増え、その分、遊ぶ時間が減りました。また、内容も難しくなってくるため、いらいらして、いそがしい中、宿題を手伝ってくれる母と大げんかをしたこともあります。

実は、六年生になってまもないころ、今までになく、どうしても補習校にたえられなくなった時がありました。宿題もぜんぜんやる気がおきず、算数のプリントをグシャグシャに丸めたことも、宿題を減らすために、母に気づかれないように、こっそりと本だなのすきまにかくしたこともありました。

ある日、まったく宿題を終わらせようとしないぼくに対して母は、「あなただけが大変じゃない。ほかの友達もみんな大変な思いをしながらがんばっている。誰のためでもなく、全部自分のための勉強なのに。あなたにやる気ないなら、これ以上サポートできないよ。」と言つて、宿題をしていた部屋から出て行ってしまいました。

その晩、ベッドの中で初めてしんけんに補習校をやめるかどうか考えました。ぼくの心の中は、全部投げ出して、楽になりたいという気持ちと、今までの努力をむだにしたいくないという気持ちがまざりあつて、すごくなやみました。でも、負けずぎらいのぼくは、物事を中途半ばに投げ出すのがいやだったし、なによりも自分の中に日本人としての自覚があることにその時、初めて気づいたのでした。

補習校生活で、ぼくが得た物は、たくさんあります。漢字の読み書きをはじめ、日本語で考える力、日本の文化、そして、何よりも友達

のきずな。苦しい中、がんばり続けて来た自分を今、心からほこりに思います。

今まであきらめることなくぼくを支え続けてくれたお父さん、お母さん、そして、やさしくしどうをしてくださった先生方、本当にありがとうございます。ぼくは、四月から中等部に進学します。

答辞(Ⅱ)

W T校初等部卒業生代表 長田 将

僕が補習校に入学してあっという間に六年が経ちました。補習校では国語や算数を勉強するだけでなく、節分や七夕などの日本の季節の行事をしたり、上級生と下級生が触れ合うお楽しみ会や、毎年全学年で力を合わせる運動会の応援合戦などでは、まるで日本の学校にいるような経験ができました。またW T校図書は、蔵書が本場に沢山あって、小さな図書館みたいでした。おかげで僕たちはふんだんに日本の本に触れることができました。

宿題が多い時や土曜日の行事に参加できなかった時、現地校との両立が少し大変と思う事がありました。僕はこのように日本を満喫できる補習校に毎週通うのがとても楽しみでした。

しかし、この六年間補習校は僕にとってずっと楽しい場所であったわけではありません。

三、四年生の頃、僕は何事にも自信がありませんでした。日本語も英語も中途半端になって、何を遣るのも難しく感じられました。友達に「ばか」とか「さる」とか言われたり、テストの点を自慢されたりすると、暗くて辛い気持ちになるのです。ぼくが一番怖かったのは仲間はずれになることでした。独りぼっちになるのはいやで、わざとおかしなことをやって見せたり、濡れ衣を着せられてもがまんしたり、とにかく必死で友達を作ろうとしていたのです。母はこのような状況を知り、心配したり、いろいろな話し合いしたりして支えてくれました。

転機が訪れたのは五年生の時です。高学年になったことで僕は頑張ろうと思いました。前向きな気持ちになると、不思議といろいろなことがよい方向に動き始めるようでした。積極的に物事に取り組み、だんだん自分に自信がもてるようになってきたら、友達が自然に沢山できて、何でも分かり合える仲間になっていきました。

辛かった時の自分を少し距離を置いてみると、落ち込んでいた自分と、その時の友達と今の仲間たちが実は同じ思い悩みを抱えていたのではないかということに気づいたのです。僕質は日本とアメリカ

両方の言葉や文化を同時に学んでいます。それは素晴らしい体験ですが、大変なことでもあり、時に大きな重圧にもなります。同じ思いを持った者同士だからこそ、その重圧から生じるストレスを相手にぶつけてしまうことがあったりもしますが、逆に又、互いの思いを心から分かり合える友達にもなり得ると思うのです。

僕はこれからA校に進みます。W T校で学んだことを忘れずに、いろんな物事に挑戦していきたいと思えます。こういう僕達をご指導くださった先生方、様々なイベントを支えてくださった父母会のお父様、お母様方、本当にどうも有り難うございました。

答辞(Ⅲ)

A校中等部卒業生代表 木原 萌

とうとうA校中等部三年一組にお別れの日が来てしまいました。私は三年間毎週楽しく通学しました。補習校が現地校より好きです。アメリカで生まれ育った私ですが、日本が大好きです。オリンピックでも、もちろん日本をまず応援します。もしかしたら、日本にいる日本人より、日本人であることを誇りに思っているかもしれません。そんな私にとって補習校は週1回、まるで日本にいるかのような楽しい一日を過ごさせてくれる学校です。

A校にはたくさん楽しい行事がありますが、その中でなんと言っても学校中の生徒たちががんばるのが蚤の市です。私は三年間蚤の市のクラス委員をして、たくさんのお金を学びました。蚤の市は日本とアメリカの良いところを合わせた行事です。家にある不要品を寄付し、生徒たちやお母さんたちの手作りの食べ物を買ります。そして幼児部の小さな子供達にゲームやお買い物もさせてあげます。また、六年生も招待して先輩として楽しく買物ができるように気を配ります。なんとなく年下の子供達を大切にしている優しい気持ちになります。そしてみんなで一生懸命、品物や食べ物をお客さんたちに売ります。その売り上げは全額ボランティア団体へ寄付します。

この蚤の市を通して私は本当にいろいろなことを考えさせられました。一年生のときはあまりよくわからなくて、先生に教えられるままに、お祭り気分で過ごしました。終わってから、蚤の市の本当の大きな目的は世界の恵まれない子供達のために寄付金集めだったということに気がつきました。そしてアメリカと日本という先進国に生まれ育った私達がどんなに恵まれているかと言うことを初めて考えました。

人は自分で、どの国のどの家庭に生まれたい、などとは選べません。日本やアメリカの子供思いの家庭に生まれてくれた私達は本当に幸福なのです。そう思う私は、心を込めて蚤の市で売るミサンガやビーズの指輪を夜遅くまで作りました。クラスみんなも同じ思いでがんばりました。いつも真剣になって協力してくださる先生とお母さん達のおかげで、私達のクラスは毎年約六百ドルの寄付ができました。

六百ドルというと、私達にとっては、当たり前のようにさせてもらっているピアノのお稽古の一、二ヶ月分、あるいは家族で行くブロードウェイのショー一回分のお金です。クラス全家庭と先生で、一ヶ月もかけて、それだけと思うと少ないような気がします。だけれど、十ドルの寄付で何ができるか調べてみると驚いてしまいます。

バングラディッシュでは百人の子供に1回の食事を食べさせてあげられます。ネパールでは一人の子供に読み書きと簡単な計算ができるように教育してあげられます。アフリカでは百五十人の子供たちに予防注射をしてあげられます。こういうことを知ると、みんなが力を合わせて協力して、ちよつと大きなことができたとうれしくなりました。そして私達が幸福に生まれて来れたのだから、その幸福を精一杯生かして世界中が少しでも幸福になれるように努力していかなければならないと思います。

それぞれの新しい人生へ向かって別れて行く私達は今、十五歳です。これからの十五年で私達はどういう大人へと成長し、人生を過ごしていくのでしょうか。補習校でがんばった力を使って、日米で活躍したいと思えます。ぜひ十五年後、三十歳のクラス会を開きたいものです。

いつも私達を励まし、何でも応援して協力してくださった先生方、父母会の方々、クラスの父母の方々、そして私の両親、本当にありがとうございました。

クラスの皆、楽しい思い出をいっぱいありがとう。十五年後には三年一組全員集合と行きましょう。

答辞 (IV)

LI校中等部卒業生代表 江川 碧

小学校を卒業したあの日から、あつという間に三年という時が経ち、大人への第一歩を踏み出すことが出来ました。私達十三人は、今日、LI補習授業校中等部を卒業します。中学を卒業するという言葉は、単純に聞こえて、ものすごく複雑な言葉だと私は思います。義務教育を卒業し、自分自身の意志で、自分の進みたい道を決める時が来たという合図、つまり、中学卒業とは、人生でも、もつとも大事な瞬間だと思います。

私にとっての補習校とは、無いと生きていけない場所。私達人間は、学校へ行き、数学、国語、理科、そして、社会科を学びます。ところが、それ以外の事は、どこで学ぶのでしょうか。例えば、友達って何？この答えは、一人一人違うと思います。私は、少し前まで、この質問に、ちゃんとした答えを出すことが出来ませんでした。けれど、今なら言えます。友達とは、心から信頼し、一緒にいて楽しい人たちである。これを教えてくれたのが、補習校でした。私は日本人であるにも関わらず、アメリカという国に住み、沢山の人種の人々と出会ってきました。そんな中、私は、とにかく友達を作ろうとっていました。けれど、その子達は、本当に友達なのか。そんなことを考え始め、私が出した結論が、「違う」でした。どうしても、どこかで心を閉ざしている自分がある。それなのに、友達友達と言うのが嫌でした。そんな私にとって、唯一本当の自分でいられる場所が補習校でした。普通に日本語で授業を受け、皆と休み時間を過ごす。こんな当たり前な出来事が、私にとっては大切な時間へと変わって行きました。それまで現地校で、沢山の人種の中に放り込まれていた私でしたが、補習校で、一週間に一度だけ、皆で集まることができるということは、私に居場所を与えてくれている様な気がしました。そして、中2の二期ぐらだから、私のクラスは、補習校の外でも、よく遊ぶようになっていました。そして、私自身も少しずつ分かり始めました。この人たちが、私にとっての、本当の友達だ。気を遣わずに、笑顔でいられる友達だと。

この答えが出てからは、私の心の中で、色々なことが、変わり始めました。補習校へ通う意味も。それまでは、強制的に行かされてきました。けれど、いつの間にか、毎週、補習校に行くのが楽しみになり、自分の意志で行くようになりました。中学にあがってからの、3年間、沢山の思い出を作ること出来ました。その中でも、思い出に残っているのは、運動会です。幼児部年中生から、高校2年生までが、全員で行い、全員がいるから、成り立っている行事です。特に、全学年の代表が走る、リレーが大好きです。一学年じゃなくて、学校全体が、ゴールに向かって、走り、応援をしようと言うことが、本当にすばらしいことだと思います。そして、勝った時の感動は、いつまで経っても忘れません。運動会は、補習校の魅力のひとつと言ってもいいでしょう。

今の私には、現地校でも、心から友達と呼べる人たちがいます。補習校にもかけがえのない友達もいます。そんな私は、本当に幸せです。でももしも、補習校と言う場所が存在しなかったら、友達の大切さに気付くことは無かったと思います。だから、補習校は、私の人生を変えたと言ってもいいほどの大きな存在です。だから、補習校と言う存在に、本当に感謝をしています。

最後になりましたが、今までお世話になった先生方、本当にありがとうございました。私を補習校に通わせてくれていた両親にも、本当に感謝しています。そして、クラスの皆さん。中学にあがってから、急激に仲良くなったクラスですけど、毎週が本当に楽しかったです。中学でやめてしまう人も何人かいるけど、中学で出会った友達は一生モノだから。また皆で遊びに行きましょう。そして、いつまで経っても、仲良しクラスでいきましょう。今まで、本当にありがとうございました。

今、この段上に立つと、僕には一つ、思い出すことがあります。

それは僕がWT校六年生の時、入学式で新入生への歓迎の言葉の挨拶をした時の事です。あの時も僕はこのような台の所に立ったのですが、背が足りなくて、台の上からはかろうじて目と頭が出ただけという、恥ずかしい思い出です。おまけに、今回の卒業式でも台の上から頭が出ないという夢まで見てしまい、それが本当だったらどうしようと、かなりあせりましたが、今それは悪い夢だったということで、ほっとしています。

さて、こうして体の方は自然に大きくはなりましたが、心の中はどうだったかという、小学3年生でこちらに来て以来、現地校と補習校の両立の苦しさをたっぷり経験しながら少しずつ成長してきたのかなと思っています。

しかし、僕もつい最近までは本当に子供で、特にアメリカに来た当時は不満なことばかりでした。

僕にとって何よりの不満は日本人日本人と言われるプレッシャーでした。「日本人だから数学が出来る。日本人は器用だから楽器やスポーツもできてあたりまえ」という、空気に僕はいつもプレッシャーを感じ、不快な気持ちにさせられていました。数学でいい点を取っても親には「日本人なんだからあたりまえ」などと言われます。周りにいるアメリカ人の中には、僕の英語を聞くと笑ったりしてバカにする人達もいました。たまに僕が何か上手く出来ると、その時彼らは都合よく「まあ、日本人だからな」などと言って、全てをそれでまどめてしまいました。一方そんな彼らは英語で悩むことはないのでテストなどの為に僕達ほど勉強する必要はありません。宿題は疲れていればやらずに寝てしまってもOK。テストで悪い点数を取ってしまえば次の日には上手に忘れてしまい、百点を取れば親とパーティーなんていう人達もいます。彼らはまさに僕達日本人とは正反対のアメリカンライフを送っていました。このような人達と毎日を過ごしていると、僕は自分

が日本人でいること自体がとても不幸で損なことばかりだと思い始め、時にはいつそ自分もアメリカ人になってしまいたいと思ったこともありました。学校ではいつも笑って楽しく振舞ってはいましたが、実は心の奥では日本に帰りたくてしようがなかったのです。そしてこうした僕の考えは中学卒業 間際になってもほとんど変わることはなかったのです。

ところが、高校に入ると僕の世界はガラリと変わりました。日本人の友達が一挙に日本へ高校受験の為帰ってしまったので、僕は強制的にアメリカ人のコミュニティーに放り込まれました。僕の学校には三千人という驚異的な人数の生徒がいるせいか、それまでよそ者扱いだった外国人の僕は、逆にうじゃうじゃいるともいえる「普通」のアメリカ人から見ても、かえってとてもユニークな存在になっていったのです。友達も増え、周りも僕を「日本人の一人」ではなく、「林田類」個人として見てくれるようになりました。

そして、それまでまったく気にも留めなかった、気付こうともしなかったアメリカの文化を少しずつ理解し、自分の「世界」が広がることも実感し始めました。それまでは自分の狭い、ただ一つの観点からしか物をとらえられなかったのが、段々とアメリカ人からの観点からも見ることが出来るようになり、今では授業で習うことや、友達と話しているようなことも、自然に「日本的な見方」と「アメリカ人的な見方」の両方で捉えられるようになりました。そしてその2つの考え方の共通点や違いを見つけるのが楽しくてしようがなくなってきたのです。「なるべく皆と同じになる」ということを目指し、周りとの「違い」を否定していた以前の僕は、今では逆になるべく他の人達とは違い、目立てる存在になりたいと思っている程です。

そうして僕は、初めて補習校に通っていたことのありがたみを知ることになったのです。僕が他の人達とは違い、ユニークな存在でいられるのは、僕がアメリカの学校に通いながらも、同時に日本語の世界を持つ外国人であるからです。そしてこうした僕でいられるのは、補習校が僕に日本語を読み、書く事だけではなく、日本の文化、考え

方などを身につける環境を与え続けてくれたからです。さらにクラスメートは皆それぞれ、色々な場所で違う経験をしているので、彼らのような人達と授業の中で意見をかわし、ぶつけ合うことで、僕の世界はますます広くなり、色々な考え方を理解できるようになりました。

そんな中、僕は今まで“日本人日本人”と周りから言われ続けられていたわけも分かってきました。それは、日本が小さい島国でありながら科学者、スポーツ選手、芸術家など、世界中でたくさんの日本人が活躍し、誰もが認める実績を彼らがつくり、日本人には力があるということが証明されているからです。そしてアメリカ人もそれを認めているのだということ。だとすれば海外にいる僕達は、プレッシャーに負けず、日本を代表する一人として恥ずかしくないよう、胸を張っていかなければいけません。

僕はここに来てようやく、自分の経験が自分の力として備わってきたことを実感し、今までの苦勞こそが僕の将来を切り開くものではないかと感じています。今は今日まで補習校をギブアップせずに続けてきて本当に良かったと思っています。

けれども、ここまで到底ひとり歩くことはできませんでした。毎週土曜日、僕達のお弁当を朝早くから作り、送り迎えの為に遠い家から何往復もしてくれたお母さんお父さん。僕たちがちゃんとした日本人でいられる為に指導して下さった先生方、そして父母会の方々にも心から感謝します。本当にありがとうございました。

そして最後に、カリナ、アカネ、ヨシ、みつみ、みずき、落合、そして高良。今日このメンバーで卒業できる事を僕は本当に嬉しく誇りに思います。皆、今日まで色々ありがとうございました！

答辞 (VI)

LI校高等部卒業生代表 岡本 大芽

笑ったり泣いたり、色々な思いを託しながら通ってきた十一年間の補習校生活が今日、此処で終わります。十一年間といっても、LI校の一年は四十三回しか授業日がありませんので、合計473回通ったことになりました。現地校や他の活動と比べても、ここで過ごした時間はあまりにも短いのです。

この短い時間の中で、僕が得たものは一体何だったのだろう。高等部に入ってからすぐのころ手にした一冊の本に、こう書いてありました。「偶然なんてない。すべては必然だ」と。この必然とは、次々と起こる出来事には、かならず目的や理由があるということを表わしていました。これを読み返して僕は、偶然だと思っていた補習校生活や出会い一つ一つに理由と目標があることに気付きました。

補習校とは日本語の読み書きはもちろん、僕たちにとっては小さい島国である日本の歴史や現在の政府の活動など、深く学ぶところですが、授業以外の行事のおかげで、僕は普通の教育では手に入れる事ができない物を入れました。たとえば運動会。単に赤白に別れて競技をするだけではなく、アメリカに住んでいる僕らが日本の文化を体験する場所を創っていた。球技大会も同じく、ただスポーツをして楽しむだけでなく、高校生にリーダーシップを発揮する機会が与えられ、励ましや応援を通して中等部部のチームワークを高めさせてくれます。そのほか、書初め大会、スピーチ大会、作文コンクールなどの行事にも、それぞれ奥深い理由による目標が設定されていたことに、気づいたので。初等部のころからそのことを意識していれば、行事から学べる事は今の数倍多かったでしょう。

だけど、こうした補習校のイベントからだけではなく、僕はもう一つ、クラスメートたちから偶然ではない重大な何かを学びました。それは「友情」です。

今年のLI校高等部二年のクラスは、小さなことですぐに盛り上がり、他のクラスに比べて少し外れていて、いつも目立つ行動を取り、だらしないところも多く、声も大きいです。このクラスには、サッカー

ーや水泳などスポーツ抜群の生徒や補習校のどんなコンクールにも必ず入選する生徒もいる。漫画のお陰で漢字が読めるようになった生徒も、他人を明るく支える人も、まっすぐ前に歩いていく人も、いつも怒っている人も、本当の自分を外に引き出してくれる人も、真顔で正しいことを言う人も。そしてそこに、自分のペースに動く僕もいました。

みんなの性格が違うにもかかわらず、僕達はいつも励まし合い、支え合い、一人一人が個性で溢れていて、僕は心強く感じていました。違った性格を持つぼくらが、ひとつの教室に集まり、楽しく勉強し、「また来週」と学校が終わって声を掛け合えるなんて、偶然の上に乗った重なった偶然だと思っていました。こんなにも気が合う十六人が同じクラスに集まるのは、奇跡的なことだと思っていました。

中等部が始まる前、気が合うクラスメートがいることを偶然だと思っていたころの僕は、口数が少なく、あまり人と話そうとはしませんでした。クラスメート一人一人の個性にさえも気づこうとしませんでした。でも「偶然なんてない。すべては必然」なのです。「友情」という繋がりを感じ始め、その「友情」からこのクラスは、顔見知り度「おはよう」としか言わない「知り合い」の集まりではなく、頭を抱えるほどの問題を一緒に話し合える「仲間」へと変わっていくところを見てきました。そして僕にとつて、「仲間」はこの様なものであつて、すごく大切なものであることに気づかされました。

これまで仲間意識をする僕達はこれまで十一年間、何を話して、何を見てきたのでしょうか。今になつては自分の胸が苦しくなつて、体の震えが止まらなく、大声で叫びたくなります。それは、今まで一緒に過ごしてきたこのクラスのつながりの深さに気づいたと同時に、これから一緒に過ごす時間の短さにも気づいたからです。今僕はきつと、溢れる後悔の中にいます。僕が、ここは偶然に満ちた世界ではなく、必然からできた世界だということにもつと早く気づいていたら、今ある掛け替えない「友情」をもっと深く強いものにし、補習校に通うまた別の理由にも気づき、理解出来たからです。

だから後輩のみなさんには、周りにあるものを偶然や当たり前として見過ごすのではなく、一つ一つの必然から理由を編み出せる事に、

より早くから気づき、今の僕のように後悔をしなくて済むようにしてほしいのです。

そして、これから新しい社会へ飛び立っていく卒業生の皆さん、長年一緒にいた仲間たちと別れて、僕らはそれぞれの人生を歩み始めます。それぞれお互いから遠く離れて、不確かな道を辿り、思いもしない所にたどり着く可能性だってあります。ですが、これから踏み出す一歩一歩は、長年過ごした仲間達と共に歩んでいる事を、心の底にしまい、強く誇りに思ってください。

今まで僕たちを支えてくださった先生方、父母会の皆さん、お父さんや、お母さん、ご来賓の方々、本当にありがとうございます。

最後に、L I 校 高等部から皆さんへ一言いわせてください。
起立！ 回れ右！ 礼！ ありがとうございます！